

ケネディとマッカーシー

ジェームズ・M・バーンズ

一九五四年という年は、ジャック・ケネディの生涯でもっとも幸福な年になるはずであった。かれは、結婚したてであったし、上院で能力を認められつつあった。だが実は、おそらくもっとも不幸な年になった。若い夫妻は、愛情の点では、この上なく大きかったけれども、政治屋の生活につきまとう激しい環境のもとでは、結婚生活と政治生活との調整が困難であることを見出した。ケネディは、政治的任用でしばしばマサチューセッツや、どこか他の場所にでかけた。やがて二人は、ヴァージニアに一二万五千ドルで家を買って求めた。が、その家で、ジャックリーンは、ときどき孤独を感じることもあった。

はるかに悲しむべきことは、ケネディの健康のことであった。一九五四年を通じ、かれの背中の苦痛は、ほとんど耐えられないほどに昇じた。あれこれの治療処置を講じてみたけれども、どれも効目があるように思われなかった。この苦痛を何とか柔げようと、かれは、自分の事務所に揺り椅子をすえ、横になるために長椅子をおいた。が、それでもなお、ほとんどその甲斐はなかった。一九四五年の半ばころまで、かれは、いつも松葉杖をはなさなかった。

しかし、一九五四年におけるもっとも悪しき局面は、上院での事態の推移であった。上院がマッカーシーとかれの策略に対する対決に向って進みつつあることが、一九五四年までには、かなり確実になってきた。マッカーシーとの対決ということは、同時に、ケネディとの対

決を意味するであろう。ケネディは一九五二年における選挙運動の時も、またそれ以後もずっとマッカーシー問題を回避していた。モリー・マーヴユリックはいった。「民主主義とは、食料雑貨店プラス自由である」と。食料雑貨店ではケネディがどこに立っているかは問題はなかった。だが、いったい、市民的自由では、かれはどこに立っていたのであろうか。

マサチューセッツの進歩派^{リベラズ}たちは、一九五四年までに、ケネディについてある種の疑惑を抱くのは当然であると感じていた。まず第一の疑点は、ケネディの家族と友人に関してであった。かれの父は、たしかにルーズヴェルト治下ではニュー・ディーラーであったかもしれない。だが、同時にかれは、金融的投機によって巨万の富を築き上げたのだった。それにかかれは、ジョー・マッカーシーと親密な関係であったし、ハーバード、フリーヴァー、ロバート・A・タフト、その他の保守主義者や孤立主義者たちとも親しかったのである。

進歩派はまた、ケネディの政治的同盟のあるものにも心配した。ニュー・ベッドフォード(マサチューセッツ)の《スタンダード・タイムズ》紙は、いままなお変ることなくかれを支持しており、またポストン《ポスト》紙のような特別な例もあった。《ポスト》紙は、ジョン・フォックスにより発行され、熱心なマッカーシー擁護の側に立っているのだが、同紙は、一九五二年にケネディを支持して、今でも時々

かれについては有利な記事を掲載した。そのみではなく、ケネディは、進歩派の一部を純理派的な「路線」とみなして、かれらに対する軽視をかくさなかった。

一九五三年一月、ケネディはじめて上院に登院したとき、マッカーシーは、かれの生涯の絶頂期に近すぎつつあった。三年間にわたりかれは、安全保障対策が手ぬるく、親共産主義的でさえあるというトルーマン政府と民主党を、さんざんな目に合わせた。

マッカーシーの共和党の同僚たちは、一方ではかれの不正直と無作法とをきらい、他方では、かれが民主党を困らせたことを卑屈によるこびながら見守っていた。一九五二年までに、共和党員は、選挙にのぞんでマッカーシーの援助を求めするために、相互に争い合ったことだ。

共和党員の中には、共和党にとっての勝利は、ウィスコンシン州出身の上院議員を処遇する最良の道だと予言するものもいた。だが、こうした期待はその後急激に挫かれることとなったのだが。とまれ、やがてマッカーシーは、外交政策と軍事政策の分野では、実質上、アイゼンハワー大統領と権力を分ち合うようになった。——今やかれは政府運営委員会およびその付属調査委員会の委員長であり、また事実上の独裁者であった。

この葛藤はアメリカ政治のあらゆる分野に波及した。とくにマサチューセッツ州では、他のどの州よりも激しかった。というのは、一方に、そこには市民的自由主義が徹底していた——その多くのものは、民主党員であったが、かれらの中にはアカデミック・ホールを根城として頑強に自己を防衛したものもあった。——祖国と党に加えるマッカーシーの破壊的傾向に嫌悪を抱いていた高慢な共和党員もいた。かれらの中には上院から自己の出身州にもどつたものもいたし、マッカーシー主義をマサチューセッツの民主党のとりこになつていたグループ、とくにマッカーシー主義にひきつけられたように思われたアイルランド系への橋わたしとみた「実際のな」共和党員もいた。

マッカーシー支持の感情が、アメリカ国内のどの地方においても、おらそくボストンほどつよく、公然とあらわれた地域は他になかったにちがいが無い。それは、とくにケネディの古くからの選挙区でもっともはげしかった——そこでは、共産主義に対するローマ・カトリックの敵意と結びついていた。ポーランド系アメリカ人のばあいと同じく、かれらの祖国におけるロシアの支配に対する感情に關係していたともいえるし、また、市民的自由の伝統に対する意識の低さとも關係していたといえよう。

マッカーシーとの個人的關係

こうした相争いつつあった見解に対して、ケネディは、いったいどのように対処したであろうか。かれは、手紙を通して、巧みな言辞を以て体をかわした。つまりかれは、問題を回避したわけだが、だからといって、自己矛盾に陥るようなことはなかった。かれは苦心して自由論者に安全保障の必要性を想起させ、マッカーシー主義者には自由と正当な手続きに対する要求を想起させた。

論争からくる緊張のため、かれの気持は不快になった。多くのアメリカ人や、かれの同僚である上院議員が行つていふような論争に自己の身を投げ出すことはかれにはできなかった。かれはどちらにも踏み切らないという意味で首尾一貫していた。しかし、多くのものには、これは不決断に見えた。

ケネディを悲しませた嵐そのものが、対決ということに直面することを不可避的にした。通信者への手紙を通じて、かれは妥協的な立場をとろうとすればそれは可能であった。だが、かれは現実に対決のときが訪れたとき、どのようにして票決するつもりだったろうか。上院の記録ははっきりしている。マッカーシー主義に關係あるほとんどすべての政策上の問題について、ケネディは、マッカーシー反対の票を投じた。しかしマッカーシー個人にかんする問題については、かれは

どちらの立場もとらなかつた。

上院における最初の一年間、マッカーシーとケネディとの個人的関係は、密接な間柄というよりも、むしろ親しい間柄といった方が当をえていよう。ウィスコンシンの上院議員は、しばらくの年月の間は、父ジョゼフ・P・ケネディの友人であり、かれをハイアニス・ポートに訪れ、ヨットに乗ってかれと語り合ったこともあったし、かれの息子は、かれの父親を通じてはじめはマッカーシーと知り合いになったのだった。

ケネディはマッカーシーの政府運営委員会に参加していたとはいへ、全委員が集まる会議はあまり多くなかつたので、二人は上院で度々接触することもなかつた。——この委員会が、かの悪名高い審問を行った調査委員会の小委員会であつた。ポップ・ケネディは、一九五三年一月から八月まで、この小委員会のためにはたらいだ。その時に、かれはロイ・コーンと議論して、辞職した。かれは、マッカーシーを排斥して選挙を戦つた一九五四年に、少数党である民主党の顧問弁護士として復転した。といつて、ポピイは、決してマッカーシーと親密になつたことはなかつたのだ。

ケネディは、マッカーシーの頑固な態度におびえたわけではなく、むしろ、マッカーシーがその気になればマサチューセツツの苦しみゝ種となるような力をもつてゐることを考慮に入れておかねばならなかつた。ケネディは、かれ自身の再選について心配しなかつた。どのみち、それは、一九五八年までは訪れないであろう。しかしかれは、マッカーシーが行くところ、そのあとに必ずおこる激しい論争の嵐の中に直接まきこまれることを好まなかつた。

上院の名誉と尊厳

マッカーシーをめぐつて渦を巻いていた問題が、一九五四年八月の初め、ついに表面化した。アメリカ憲法附帯条項第五項にもとづき、

証人の権利の放棄を強要することを目的とした免除法案に対し、ケネディは前年、同様の法案に反対投票したときと同じように、この時も、反対の票を投じた。しかし、いずれのばあいにも、この票決は記録されなかつた。しかもケネディは、それらの法案に反対し、それが記録されることを要求して起ち上つた一〇人の上院議員の中の一人でもなかつた。ケネディは、免除反対の投票をしてから一週間後、議会侮辱を理由としてコーリス・ラモントを召喚することに賛成投票した。しかし、ケネディは委員会ではラモント召喚に対してたつた。すなわち、マッカーシーが、ラモントの著書を取り上げてかれを攻撃したが、こうしたことが違憲であることを、ケネディは非難した。マッカーシーはしばらく当惑した。ケネディは、新聞記者がドアの外で待期している間中、自己の主張をゆづらなかつた。結局、委員会は、ラモント召喚の合憲性について判定を下してもらうために司法省に伺いを立てることに意見が一致した。その結果、司法省は、それを合法的だと判定し、ケネディは上院で、ラモント召喚賛成の投票をした。上院の進歩派の中で、たとえばハンフリーやサイミントンも、ラモントの召喚に賛成した。

当時、上院はアメリカ国内における共産主義者排斥の措置を強化することを考慮していた。ケネディは、破壊活動防止法 (Subversive Activities Council Act) 改正のために賛成投票を行った。この法案は、防衛活動に従事する人びとに關して、安全保障調査を行うために委員会を設置することを目的としており、また、現在ある種々の防衛計画における重複を解消することを目的としていた。しかしこの法律の改正は審議中のより苛酷な反共産主義対策を推進するための代案として意図されていたため、失敗に終つた。

上院議員ラルフ・フランダースは、七月三十一日、テレビ放送された陸軍マッカーシー審問の電撃的ドラマを聞いた直後、譴責決議案を議会に提出した。「決議、ウィスコンシン出身の上院議員の行為は、アメリカ合衆国上院にふさわしくないということ、そしてかかる行為

は上院の伝統に反することであつて、上院の信用を落させる傾向があること、そこでこのような行為は、非難さるべきことと宣告さるべきである。」

ケネディは、一度だけ発言した以外は、上院で交わされたはげしい討議の間中、じつと、着席していた。この発言とは、マッカーシー支持の立場に立つ上院議員が、アンニー・リー・モスのばあいについて行った言いちがいを訂正するためになされたものであつた。

ケネディは、譴責議決案に対して賛成投票することに決めた。しかし、フランダーズのいうような意見にもとづいてではなかつた。ケネディは用意した原稿で（演説は行わなかつたが）自由主義陳宮とかれの立場を慎重に区別した。問題は、「ウィスコンシン出身の下級議員の動機とか誠意とかにかかわるものではない。」かれは論じた。「われわれは、マッカーシー議員に対し賛成の投票をするか、反対の投票をするかということ問われているのではない。」かれは、マッカーシーのとつた「過去長年にわたる非行」にもとづいて投票する自由がないように感じる、と言つた。当時、かれもフランダーズも、公然とマッカーシーに反対したのではなかつた。さらにまた、かれが、外国の意見をやわらげるために譴責に賛成投票をすることもできなかつた。

かれはやはり、譴責に賛成投票をするつもりであつた。なぜか。マッカーシーが上院の名譽と尊嚴を非難したからだ。しかし、その日上院では、フランダーズの譴責議決案について、最終的決定はなされなかつた。上院の多数党の指導者である共和党のノーランドが、決議案に対して猛然と反対し、譴責について討議するために特別委員会の設立を提案した。リベラルなグループは、マッカーシー嚴罰に伴う心理的時期が失われるのを懸念して、この譴責議決案に反対したことも手伝つた。ケネディと共和党員L・ソルトンストールとは、ノーランドの延期措置に賛成した七五人の議員の中に含まれてゐた。この延期措置は、とりも直さずケネディ自身の演説の延期を意味した。

マッカーシー譴責とケネディの立場

公開投票は行われるにちがいない——しかし、ケネディはそれに参加することはできなかった。かれは、いやます肉体的苦痛をこらえながら、マッカーシーをめぐる討論の間中、席に着いていた。上院が休会になると、直ちに、かれは、休養のためハイアニス・ポートへ行つた。しかしかれは快方に向わなかつた。苦痛は耐えられないほどに昂じた。

背中を外科手術するため、ケネディは入院した。数カ月病院にとどまっていた。譴責動議が最終的に十二月二日の投票となつたときも、かれはやはり入院していた。「病気のため上院の許可をえて欠席」として、かれは名簿に記録された。票決の結果、マッカーシー反対六七票、賛成二二票となつた。マッカーシー賛成の票は共和党の少数派のみであつて、民主党員の中、だれ一人としてかれを支持したものはいなかつた。ところで譴責の主な根拠となつたものは、全般的な非行を理由とするマッカーシーに対する長期的非難から、とくに譴責委員会の各委員に対するマッカーシーの具体的な言辞に変えられていた。

判決はマッカーシー自身にはこたえた。かれは二度と上院で権力者となることは決してないであろう。ところで、後年になつて、ケネディに対する判決を持ち出したものもいた。つまり、マッカーシーおよびマッカーシー主義に対してかれは軟弱であいまいな態度をとつたと、たとえ病のため投票に参加することができなかったにせよ、譴責にかんする自己の立場を上院に対して公的な形で通告すべきであつたし、さもなければ他の上院欠席議員すべてがしたように、他の欠席議員と「組んで」反対投票をすることもできはずだ、という形で問責された。

ケネディに対する評定でとり上げられる事實は、果してどうか。一方では、

(一) たとえば調査委員会用資金というようなマッカーシー自身の役得をふくむ動議に対し、ケネディはほとんどすべての他の上院議員と同様に、マッカーシーを支持した。

(二) ケネディにとって、個人的自由にもとづく要求と、国家的な安全保障にもとづく要求との両者の間に明確な区別をすることをまぬがないように思われる問題について、かれは後者を優先させた。

他方では、

(一) 市民的自由という明白な問題について、ケネディはマッカーシー反対の投票をした。

(二) マッカーシーがとくに支持した任命に対して、ケネディはマッカーシーに反対した。

一方においてまた他方において、

(一) フランダース動議を阻止して、ケネディは進歩主義的な反マッカーシー陳宮に反対投票を行った反面では、譴責委員会の設置を支持した。マッカーシー反対の投票を行ったワシントンの観測筋によれば、フランダース動議は失敗してもよかった。委員会はマッカーシーを譴責した。譴責は、上院に徹底し、それはウィスコンシンの上院議員にとっては非常な打撃をあたえた。しかし、万一、八月にマッカーシー反対の過半数の票が集められたとしたら、ケネディにとって少くとも同様の打撃をあたえることができたであろう。

(二) 譴責がもし八月に行われたとしたら、ケネディは「上院の名誉と尊厳」という限定的な理由にもとづいて、譴責に対するそれに賛成演説を行い、そして投票したであろう。

(三) ケネディは病気で最後の譴責に投票しなかった。肉体的に投票することはできなかったし、自己の意見を表明するためにいかなる措置もとれないなかった。かれが、もし出席していたならば、八月中にはそうと計画していたと同様の限定的な理由にもとづいて、譴責賛成の投票をしたにちがいないことは事実である。しかし、マッカーシーがはじめてマッカーシー主義を政治問題とした一九五〇年以後、上院で

最終的に譴責投票が行なわれた一九五四年までの間、いやその後でさえ、長い間、かれはこの問題について立場を明らかにしなかった。

記録はこの程度にしておこう。とまれ、最終的な譴責に投票しなかったことほど、最近、ケネディを苦しめたものはなかったという点は事実である。副大統領をねらっていたとき、そして後には大統領をねらっていたとき、マッカーシー問題をめぐる聴衆からうけた鋭い質問は、かれの平生の完全な落ち着いた態度をかき乱すほどであった。マッカーシー主義に関するかれの不明確な記録は、多くの進歩主義者たちにとっては、最大の問題であった。このことが、(大統領候補者を決定する) 政党代表者会議に対して、若干の影響をあたえた。要するに、マッカーシズムは、マッカーシーの死後といえども「死ぬことのない問題」であったのだ。

なぜケネディはあのような譴責の立場をとったのか。

一般に、反マッカーシー議員たちは、マッカーシー攻撃にかんして二つの異った方向をとった。フランダースは激昂するのが遅かったが、一度昂じてくると非常に強硬な態度をとった。しかし元来は温健的なヴァーモント出身のかれは、マッカーシーがきわめて道義的な問題を提起していると感じた。だからフランダースの譴責決議案は、法的な記録というより、むしろ憤激のあらわれといった方が当るものであった。

一方、他の反マッカーシーの方向は——この方向が結局において譴責委員会自体が採択した方向であった——、もっと法的なものであり技術的な点を含んでいた。マッカーシーはたしかに上院の礼節をわきまえなかった。同時にまた、上院の明記された規則と、明記されない規則にそむいた。この意味ではかれは、法律違反者として拘束されるべきである。だが、当然とらるべき手続きをふまねばならない。譴責委員会は、マッカーシーに有利に考慮してやるという態度をとって、フランダースおよび進歩主義者が根拠とした形での譴責処分を否認した。だが、かれらといえども、上院議員と上院委員会に加えたマッカ

シーの破廉恥は態度を無視することはできなかった。

こうした二つの方向のうち、ケネディは第二の道をえらんだのだ。かれは、マッカーシズムを道義的問題としてより、法的な手続き上の問題とみなす傾きがあった。

ある意味でこれは奇妙なことである。というのは、マッカーシーは、ケネディが日頃個人的に嫌悪していたあらゆる面を象徴していたからである。

マッカーシーは俗悪、粗暴、粗野、皮相的、不信実といった政治の野卑な要素を代表していた。ケネディがこの上なく高い価値を認めている伝統、規則正しい手続き、上院における上品な諸々の作法をマッカーシーは嘲笑したのである。にもかかわらず、ケネディは、マッカーシー擁護のためにも、またマッカーシー反対のためにも堂々と弁ずることをしなかつたのである。かれは、マッカーシー主義の問題を自己の信念通りに投票して、それ以上何もしなかつた。

ではいったい、あれほど多くのアメリカ国民にとって当時、すぐれて道義的問題に属する事件にたいし、ケネディがこうした限定的な立場をとつたのはなぜなのか。

一つの理由は、マッカーシーにかんする主要な告発が、正当な手続きと、フェア・プレイに対する侮辱に向けられていたため、マッカーシー反対がたとえどのような形で行われるにせよ、慎重な法的手続きにもとづいてなされねばならない、という意見によるものである。ケネディは、特別の告発を受けるべきだと感じたのである。

しかし、もう一つの理由は、はるかに個人的なものに基因していた。かれの弟ボップは、かつてマッカーシー・スタッフの一員であった。つまり、かれの父は、マッカーシーの友人であった。「だから私は、マッカーシーが一九五二年あるいは五一年——私の弟は一九五三年にマッカーシー・スタッフとなった——に行つたことに対し、周囲が叫び立てていることに、むしろ嫌悪を感じていた。」ケネディはいふ。「それが実のところ、事態の真相なのだ。」

「正当な非難」

とはいえ、このようにケネディが自己の立場にかんする決定的な理由だと考えるものは、依然として基本的な理由とはいえないかもしれないのである。ではそれは、政治上の便宜手段だったのか。ある程度まではたしかにそうだ。一九五八年の選挙戦を当然考慮に入れるときかれは、ウィスコンシンにおける郷土愛的感情につながるマッカーシーびいきの強さを決して忘れることができなかった。そうはいっても、かれの立場は、かれに対する外からの圧力というより、かれの内部の圧力として反映した。市民的自由の信条は、かれの家族の伝統の一部でもなかつたし、あるいはかれの幼少時代の環境の一部でもなかつた。それは、後年、かれがハーバードではじめてお目にかかつたものであった。その時でさえ、当時の最大の関心事は、市民的自由ではなく、国内の経済的・社会的改革ないし海外における干渉という問題であった。

今日、マッカーシー主義に対するケネディの判断をみれば、マッカーシー主義が最大の問題であった進歩主義者たちから、かれを区別する基本的態度が、明らかになる。「マッカーシー問題はすべて、上院でつねに一般化していた空気を見通した上で判断が下されねばならない。そこでは、大部分の議員は、他の者の行動を個人的に裁判することをいやがった。おそらくこのことは、マッカーシー事件ではまちがっていたであろう。おそらくわれわれは、ある種の議員ほどには神経質ではなかつたし、またもつと速やかに行動すべきであつたらう。このことはまた、私に対しても当てはまる正当な非難である。尤も、私はマッカーシーへの同情とはまったく無関係であり、とくに私が何回かにわたってマッカーシー反対の投票を行つた後は、かれとはなんら親密な関係をもつていなかったのは事実である。」

こうした事情が、五年の歳月を経た後の今日のマッカーシーに対してとった立場にかんするケネディの「正当な非難」であった。かれは、この五年の間この問題にどのような形で対処してきたのか。

かれは、この問題をまったく無視することはできなかった。というのは、進歩主義者たちは、かれにそれを無視させなかったし、一方、ジャーナリズムもそうであった。記者とのインタビューやテレビの討論会で、この問題が質問されないことはほとんどなかった。一九五五年の春、上院に復帰したとき、かれは、巧みに解答を回避した。一九五六年の党大会の二、三週間前、かれは、上院の譴責決議に対して賛意を表明した。しかし、それは、ある種の人びとには日和見と思われた。そして《勇氣ある人びと》が公判されると、記者たちは、ケネディは横顔をそう見せなくてもよいがもっと勇氣を見せるべきだという言葉をささやいたものだ。

とりわけ、ルーズヴェルト夫人は、ケネディの立場に対し批判的であった。

ルーズヴェルト夫人の批判

ケネディが上院に帰ったとき、なぜ自己の立場を明らかにしなかったのかとかの女は、かれのためにとりなしをしたケネディの友人たちに詰問した。「マッカーシー主義は公職にあるものが態度をはっきりさせなければならぬ重要な問題であると私は考える。」とかの女はかれらに語った。「私は、この問題について立場をはっきり言明したからない人の政治的将来を信頼することはできない。」かの女は、上院の票決を支持するだけでは十分でないと述べた。「公けの奉仕者たるものは、マッカーシー主義がわが国家に対してどんな害悪をあたえたか、また、将来もそうした害悪が起りうるということに対して、積極的にそれに反対する意志を明確な形で表明することが必要だと私は考える。」

あの当時ケネディが、市民的自由に対する進歩主義者の信念がどのように強いものであったかということ、本当に理解していたかどうかはうたがわしい。進歩主義者にとって、言論および良心の自由は、政府の他の望ましい諸原理と同等におかるとすべき価値のある単なる政策だとは考えられなかった。

それは、進歩派の価値階層の最上位を占めていたのである。社会的・経済的問題において実験するのはよいが、しかし権利条項 (Bill of Rights) の基本的自由を干渉することは許しがたいことだとリベラルは感じた。なぜなら、これらの自由が保障されうるばあいのみ、政府の自由な過程に、失敗の発見や訂正の措置がとられうるからである。アメリカにおける市民的自由の遺産は、ソクラテスとミルトン、ジョン・スチアート・ミルと J・O・R・ホームズらによって、長い年月にわたり日に新たにされてきた信念であった。じじつ、それは必要とあらば、そのために多くの人間が死を賭してもいとわぬ戦闘的な信念であった。アメリカにおける市民的自由は、マッカーシー主義の残忍な風によってふみにじられたときほど、脅威をうけたことはないとりべラルは感じたのであった。

問題は、一九五九年四月、ケネディが、マッカーシーの出身地ウィスコンシンへの選挙運動旅行を行ったとき、ふたたび、ひょっこりと持ち上った。クラズグリディロン新聞の主催するケネディの晩饗会の席上、仮装した記者たちが、「クレメンタイン」の曲に合わせてつぎのように歌った。

「ジョン、あなたはどこにいたの。ジョン、あなたはどこにいたの。上院がジョウをとり調べたとき。」

マッカーシーの故郷の町アプレトン——そこには現在、一九五七年に死んだ故マッカーシー上院議員のための記念碑があった——で、聴衆の一人の質問者が起った。かれは、ケネディがマッカーシー主義に対して軟弱な態度をとったというルーズヴェルト夫人の批判について、

ケネディに意見を求めた。ケネディは幾分いらだちながら、自分が市

民的自由を尊重していることは記録上明白であり、「私はその点に関して、あなたやルーズヴェル夫人からどのような非難告発をうける覚えもない。」と述べた。その年の末、リチャード・ロヴィアー著『上院議員ジョー・マッカーシー』についての新聞論評において、かれは、国家は「マッカーシー旋風」から「健康」を回復したと言い、ロヴィアーは、「いまなお活躍しているマッカーシー讃美者の礼賛と、あの口ぎたない悪意に充ちみちた手紙の洪水」を覚悟すべきだと述べた。（ケネディ自身は、——その男は、その本をほめることによって、カトリック教会のつら汚しになった、と云った、セント・ルイスにすむ一人の読者からかれの書評にかんして一通の手紙をうけた。しかし、アメリカにおけるカトリック教会の態度は、必ずしもマッカーシー擁護とは限らないという事実を指摘しておく必要がある。じじつ、リベラルな立場に立つカトリックの雑誌『コンモンウィール』や『アメリカ』は、個々の大勢のカトリック教徒、とくに指導的なカトリック教徒の知識人が抱いていたと同じような強い反マッカーシー的立場をはじめからとっていた。）ケネディはその時もやはり、進歩主義者が要求したような、マッカーシーについての露骨な非難は行わなかった。

なぜ、非難しなかったのか、一つには自尊心、あるいは強情さから。つまり、かれは、自己の考えの上でとったと感じている立場から逃げだすという印象をあたえることを欲しないからである。一つにはそれが無益なことだとかれが判断したから。つまり、かれは、アメリカの政治における中央のリベラルな側に位置を占めることを選んだのである。また、それだけにいっそう冒險的な市民的自由の辺境をハンフリーやスチヴンソンに残したからである。しかし、主たる理由は、かれの内部にある古風な圧力が、やはりある程度まではたらいっているからだ——たとえ、連邦に学資を借りようと申込む学生たちから要求される忠誠の誓いのような形での市民的自由の問題については、かれ

は強力な市民的自由主義の立場をとったにせよ。

リベラリズムの遺産

当面の問題にたいするケネディの立場にかんして、その中心的な手がかりとなるものは、このことである。かれは、具体的な諸問題に対する自己の経験から、発作的にリベラリズムを形づくってきた。かれは「食料雑貨店」——経済的リベラリズムの遺産を志してきた。しかし、自由の遺産にはなかった。かれはできあいのリベラリズムの哲学を探し求めようとは決してしなかった。今日ケネディは、このことをはっきり認めている。

「ある種の人びとは二〇代までに自分のリベラリズムを『作ってもらう』かれはほとんど物思いに沈んでこう述べた。「私はそうではなかった。私は奔流や渦にとらえられた。私が事物の中に自ら身を投じるようになったのは、ほんの最近のことであった。」マッカーシー時代は、長い間にわたりケネディ自身のリベラリズムの成熟と深化に貢献したかもしれない。しかし、かりにそうだとしても、なおかつ、かれも進歩主義者たちも、それを認めようとしないのである。

『ブロッグレス』誌一九六〇年九月号所収（訳・玉井竜象）